

令和5年度 入賞作品集

「わたしのふるさと」作文・絵画

中学生広場「私の思い 2023」作文

「豊かな心をはぐくむ家庭づくり」

(家族ふれあいサンデー推進運動) 絵画・ポスター



彦根市青少年育成市民会議

彦 根 市

彦根市教育委員会

ごあいさつ ～子どもは社会を映す鏡（かがみ）～

彦根市青少年育成市民会議
会長 吉田 徳一郎

彦根市青少年育成市民会議は、「地域の子どもは地域で育てましょう」と活動をしている市内各小学校区の青少年育成協議会が集まり、彦根市より委託を受けた「あいさつ運動」をはじめ各事業を行っている団体です。また、県、国の青少年育成会議の活動にも参加しております。

「豊かな心をはぐくむ家庭づくり（家族ふれあいサンデー推進運動）」に関する絵画・ポスターや中学生広場「私の思い 2023」作文の募集は、作品のテーマを通じての青少年の心の育成でもあり、県や国の青少年育成会議の活動に参加してのものです。優秀作品は県に送られ、県でも優秀作品に選考された作品は、国に送られます。

彦根市青少年育成市民会議や各学区(地区)の青少年育成協議会は、国を挙げての次代を担う青少年の健やかな育成の一端でもあります。

そんな市民会議と学区(地区)青少年育成協議会にご理解とご支援いただき、誠にありがとうございます。

さて、最初の文章が長くなりましたが、今年も多くの作品が、小・中学校の先生のご指導のもと集まりました。これらの作品に接しますと子どもたちが家庭で、地域で、見て・聴いて・体験して健やかに育っている様子がよくわかります。是非、ご覧いただき、お読みいただけたらと思います。よろしく申し上げます。

しかし、青少年の育成には、「健やか」だけに目を向けている訳にはいきません。ニュースにも流れましたように、白昼に堂々と高級時計店、宝石店に車で乗り付け、ショーケースを割り、商品を奪うという事件が2023年にはありました。犯行に及んだある少年は、200万円もらえたとスマホで知り、闇のバイトに参加したそうです。金品に価値を置き、金品に頼ってしまう今の社会を映す事件ではと思います。

スマホによるいじめや大切な情報の拡散は、自身の思いとは異なり、事件の被害者や加害者になってしまいます。これらも、私たち大人が進めている社会を映しているように思えます。

子どもに見せる私たちの姿が、いつの時代も大切なのではないのでしょうか。若くして亡くなられたお母さんが、命の消える間際に小学生の我が子を枕元に呼び、「真人間になりなさいよ。真の人間として生きていきなさいよ。」と話されたと、ある本に載っていました。

健やかな青少年の育ちをご祈念申し上げます。

はじめに

彦根市長 和田 裕行

7月、彦根市はこども家庭庁の「こどもまんなか」の趣旨に賛同して、「こどもまんなか応援サポーター」として活動していくことを宣言し、『彦根市すまいる・あくしょん取組宣言』を行いました。その内容は、「こどもたちの笑顔や声があふれるまち」、「こどもたちの様々な学びができるまち」、「こどもたちの心豊かな成長を社会全体で応援するまち」など、こどもを中心にしたまちづくりの推進です。

こどもが犠牲となる事件等が後を絶たず、こどもの貧困に関する問題、ヤングケアラーやひきこもりの若者など、こどもたちを取り巻く環境がたいへん厳しい中、もはや、家庭だけ、学校だけでは改善できません。家庭、学校、地域、そして市民の一人ひとりがそれぞれの役割を果たし、市民総ぐるみで「こどもまんなか」の取組の輪を広げていく必要があります。

本市では、「こどもまんなか」に通じる青少年健全育成に向けた取組の一つとして、昭和57年より小・中学生から作文を募集し、発表の機会を設けてきました。今年度で「わたしのふるさと」作文は38回目、中学生広場「私の思い2023」作文は26回目を迎えました。また、「わたしのふるさと」絵画は14回目、「豊かな心をはぐくむ家庭づくり」(家族ふれあいサンデー推進運動)絵画・ポスターは33回目となり、いずれも多くの学校で取り組んでいただき、大変うれしく思っております。

「わたしのふるさと」作文・絵画では、家族とのふれあいや、地域の人々との交流などを通して、子どもたちが自分たちの住む地域のすばらしさに気づき、ふるさとを再発見し、表現するよい機会となっています。また、中学生広場「私の思い2023」作文では、中学生が自らの意思や決意を表現しており、未来に向けてたくましく行動し実践していく姿が思い浮かびます。さらに、「豊かな心をはぐくむ家庭づくり」絵画・ポスターは、家族の心のふれあいや温かさをテーマにした作品がたくさんあり、家庭の大切さについて改めて考えさせられるものとなっています。

収録しました子どもたちの生き生きとした作品に触れていただき、今後とも、子どもや若者へのご理解を深めていただきますとともに、青少年健全育成の活動にますますご支援いただきますようお願いいたします。

最後になりましたが、作文ならびに絵画の指導や審査にご協力いただきました先生方、また、子どもたちをいつもあたたかく見守り、日々向き合っておられる保護者の皆様、そして地域の皆様に心からお礼申し上げます。

も く じ

「わたしのふるさと」作文

特 選

ハスをつかまえたよ	稲枝西小学校	2年	山本 悠嵐	1
ふるさと鳥居本の良い所	鳥居本小学校	5年	飯田 大和	2

入 選

家から見えるひこねじょう	城北小学校	3年	菊井 愛莉	3
びわ湖ってすごいぞ	平田小学校	4年	佐野 碧哉	4
国宝彦根城の世界遺産登録を目指して	城西小学校	5年	川上 心遥	5
誇りの伝統行事、マーチングバンド	城東小学校	6年	小鉢 麻琴	6

中学生広場「私の思い 2023」作文

特 選

「立派な大人」へ	西中学校	3年	前川 愛佳	7
戦跡訪問研修を通して学んだこと	彦根中学校	3年	安田 絢音	9

入 選

言葉	東中学校	3年	池田 杜愛	11
バングラデシュはなぜ親日国なのか	東中学校	3年	ロイ 友貴	12
「挑戦する」ということ	南中学校	3年	島村 日和	13
親の存在の大きさ	彦根中学校	3年	宇津 椿希	14
三百六十度	鳥居本中学校	3年	後藤 咲良	15

「豊かな心をはぐくむ家庭づくり」(家族ふれあいサンデー推進運動) 絵画・ポスター

特 選

かぞくみんなでプラレール	城西小学校	1年	菊本 遥日	17
楽しかった夏休み	旭森小学校	6年	石原 結月	17
家族仲よし	河瀬中学校	2年	富川 希	17

入 選

にこにこ家族	旭森小学校	2年	辺志切 奏	18
家族でプールをして楽しかったよ	城北小学校	3年	内堀 桜輔	18
ひかりちゃんとニコニコ	城東小学校	4年	寺村 実結	18
だれのが一番ながいかな	金城小学校	5年	杉田 あかり	19
家族で温まろう	西中学校	2年	牧野 圭佑	19
家族は笑顔の源	西中学校	3年	榎本 結香	19

「わたしのふるさと」絵画

特選

				頁
たかみやのはなび	城西小学校	1年	北村 碧葉	20
びわ湖岸でサイクリング	城西小学校	4年	毛利 優太	20
宝の矢倉川	鳥居本小学校	5年	小堀 珀斗	20
摺針峠から	鳥居本中学校	1年	小嶋 歌歩	20

入選

ひこねじょう	旭森小学校	1年	長谷川 ひな	21
おばあちゃんのはたけ	鳥居本小学校	2年	飯田 絢心	21
私の町の小さな川	城東小学校	3年	國枝 奈乃葉	21
ふるさとの夜	城北小学校	4年	井尻 宗寿	21
立夏の頃	佐和山小学校	6年	川幡 莉良	22
芹川	佐和山小学校	6年	西山 璞翔	22
虹	西中学校	2年	辻 佳奈恵	22
緑の夏	鳥居本中学校	3年	後藤 咲良	22

佳作入賞者一覧 23

審査員紹介 24



<作品応募状況>

	参加小学校	参加中学校	応募数
「わたしのふるさと」作文(小学校)	11校		41編
中学生広場「私の思い2023」作文		6校	31編
「豊かな心をはぐくむ家庭づくり」 絵画・ポスター	14校	4校	小学校 58点 中学校 18点 計 76点
「わたしのふるさと」絵画	14校	3校	小学校 64点 中学校 8点 計 72点

わたしのふるさと 作文

<特選> ハスをつかまえたよ

彦根市立稲枝西小学校 2年 山本 悠嵐

ぼくは、魚つかみが大好きです。いつも、いへの近くの川をのぞきこんで、大きいドンコやメダカ、どじょうなどをつかまえています。

夏休みには、犬上川の生きものかんさつ会にさんかしました。犬上川には、アユやおうみヨシノボリ、ウキゴリなどがいました。

ぼくは、その会で、ハスという魚をつかまえました。魚は、草むらのかげや岩の下にいと教えてもらったので、ぼくはそこをさぐりました。すると、ハスがぼくのあみの中に、いきなり入ってきました。大きさは、大人の手ぐらいです。ハスはどうかやって入ったかという、ハスはびっくりさせたらジャンプするそうなので、ぼくが草むらを足でごいごいとさぐっていたら、ハスがびっくりしてジャンプしたのです。そして、それがたまたまぼくのあみに入ったのです。ぼくは、ハスをつかまえられて、とてもうれしかったです。

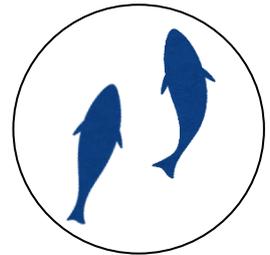
川の生きものかんさつ会では、ほかにも、色々な魚のせつめいを聞きました。ぼくがつかまえたハスは、口の形は、への字になっていると、先生は言っていました。

また、犬上川には、ぜつめつきぐしゅのハリヨという魚がいることを教えてもらいました。ハリヨは、せなかにトゲトゲがあって、キレイな川にしかすんでいないそうです。もう今では、このあたりでは、ひこねにしかいないと聞きました。ぼくは、それを聞いて、かわいそうだなと思いました。そして、ハリヨをまもろうと思いました。それから、ハリヨをとらないほうがいいと思いました。

ぼくは、ぼくの大好きな魚たちのキレイな川を

まもりたいです。だから、そのキレイな川にゴミとかをポイすてしないようにします。そして、これからも色々な魚をつかまえて、もっと魚のことを知っていきたいです。

らい年も、犬上川の生きものかんさつ会にさんかできるのをたのしみにしています。



【ひとこと】

筆者は大好きな魚つかみを生き物観察会で体験しました。つかまえたハスの様子を感性豊かに書き表しており、嬉しかった筆者の気持ちが伝わってきます。観察会で知った絶滅危惧種のハリヨの存在。ハリヨを守りたいという思いが芽生え、大好きな魚が生きる川を大切にしたいという思いに至ります。体験を通して生まれたふるさとへの思いを2年生なりに見事に表現した作文です。

<特選> ふるさと鳥居本の良い所

彦根市立鳥居本小学校 5年 飯田 大和

僕は今、夏休みの宿題として、絵をかいています。その題材は鳥居本の名所にしています。その理由は、ぼくの大好きな鳥居本を、絵を通して、みんなに見てほしいからです。

一年生の時には、鳥居本駅をかきました。

鳥居本駅は、えんとつがあり、レンガの屋根でできた無人駅です。無人駅には、駅長や駅員がいません。そのため、鳥居本駅はとてもめずらしい駅だと言えます。

鳥居本駅には、「ガチャコン」という愛称がついた列車が止まります。ですが、鳥居本駅に止まる列車の数は少ないので、一回でも乗りおけると、一時間ぐらい待たなければなりません。けれど、鳥居本には、鳥居本駅しか駅はありません。なので、鳥居本の人たちは、とてもありがたいと思っています。

そんな、どくとくな特徴をもつ駅だからこそ、ぼくはみんなに見てほしいのです。

四年生の時には、赤玉神教丸で有名な、有川製薬という薬屋をかきました。江戸時代に建てられた古い店で、赤い玉の薬を売っています。通称「赤玉」は、腹痛回復効果がある常備薬です。そんな赤玉ですが、その建物自体もすごいです。なぜなら、江戸時代のすがたのまま、残っているからです。昔ながらの、複雑な柱の組み方で、時代劇にでてきそうな感じの店です。中には、有川製薬の歴史を語る説明が設置されています。外には、明治天皇が休けいに使ったと書いてある石ひが設置されています。そんなえらい人が来た所が鳥居本にあると知って、ぼくは大切にしようと思いました。

五年生では、男鬼町をかきました。昔ながらの風景、町なみが残っています。近くには、森や

草むらがあるため、野生動物や、滅多に見ない虫や魚がいます。だから、直接自然にふれあうことができます。ぼくも、実際に絵をかくために男鬼町へ行ってきました。空気はおいしく、静かで、いつまでもいれそうな所でした。そして、男鬼町へ行く前と行った後に鹿に三頭出会いました。巨大な自然の中で生きていく鹿に感動しました。

また、ぼくの家は、中山道沿いにあります。ぼくにとっては、普通の道です。ですが、週末になると、その道を歩きにくる人がいたり、建物や道を写真におさめる人たちを見かけます。このような事から、中山道は歴史があるのだなと思いました。

そうした事から、鳥居本は、自然と歴史を共に歩んできたことが分かりました。そして、ぼくは、鳥居本の歴史を守っていこう、広げていこうと思いました。また、自然との共存と暮らしを深めていこうと思いました。これからも、鳥居本を愛し、自然との共存、歴史交流をかかさずにしていこうと思いました。



【ひとこと】

自分が住んでいる鳥居本の名所をみんなに伝えたいと願い、1年生の時から継続して絵に表している姿に感心します。また、その絵を題材に作文に表したことは見事で、発想の豊かさを感じます。鳥居本駅、有川製薬、男鬼町、どれも実際に見て触れて実感したふるさとの宝物です。鳥居本の自然や歴史を今後も大切に守り、伝承していってくださいね。

<入 選> 家から見えるひこねじょう

彦根市立城北小学校 3年 菊井 愛莉

夏休みのはじめの日曜日、お母さんとおばあちゃんとひこねじょうに行きました。学校のふるさとたんぼうオリエンテーリングの時は、ひこねじょうを外から見ただけだったから、中にも入ってきました。

行く前に、ひこねかるたのことを思い出しました。それは、ほ育園の時にみんなでおぼえました。そして、ひこねじょうにかんけいするかるたを出しました。その中で見てみたいと思ったのが、五つありました。

『㊦赤ぞなえ 直まさぶゆうの せきが原』

『㊧ろうかばし いくさになれば 落としばし』

『㊨夜明け前 かね鳴りひびく 時ほうしょう』

『㊩着見台 着見と月見の 見はりろう』

『㊪西にうみ 東にすずかの 金きじょう』

かるたを持って出発しました。

はく物館に行ったら、赤ぞなえがおいてありました。これをつけてたたかったら、おもそうだし、動きにくそうだと思いました。

はく物館を出て、石のかいだんを上ると、ろうかばしがありました。わたしが、もし、ろうかばしで落とされたら、おしろに入れなくなるなど思いました。

さらに上ると、時ほうしょうがありました。時間を知らせるかねなので大きいと思ったら、意外と小さかったです。

一番上まで行くと、着見台という場所がありました。今、たて物がありませんでしたが、そうがんきょうがありました。のぞいてみると、電車やじょう北小学校、びわこが見えました。

いよいよ天しゅかくです。かいだんのはばがせまくて、きゅうだったので、とてもあがりにくかったです。せめてきたてきは、時間をとられると思いま

した。そして、かべには三角や四角の穴があり、そこから鉄ぼうをうったと書いてありました。おしろの一番上まであがると、びわこや遠くの山やひこねのまちが見えて、とてもきれいでした。

ひこねかるたでおぼえたことがじっさいに見れて、ひこねじょうのことが少しずつわかってきました。

ひこねかるたの中には、ひこねじょう以外のことも書いています。もっとそこにのっているところに行って、ひこねのよさやれきしを知りたいし、みんなにも知ってもらいたいです。



【ひとこと】

漠然と彦根城に上るのではなく、行く前に彦根かるたに書かれてある内容を思い出し、目的をもって上ったところが素晴らしいです。かるたの場所を一つ一つ確かめながら訪れた様子が分かりやすく書けています。そこで見たことや感じたことは、インターネットや本の中では味わえない本物の体験となりました。

<入選> びわ湖ってすごいぞ

彦根市立平田小学校 4年 佐野 碧哉

『びわ湖』

この言葉は、ぼくがお父さんやお母さんやお姉ちゃんに、

「滋賀県と言えば何を思いうかべる？」
とクイズを出したときの答えです。ぼくは、「やっぱりな。」

と思いました。

なぜぼくがこのクイズを出したかという、夏休みの宿題で都道府県の場所を覚えるためでした。初めのうちは、順番に都道府県の名前を声に出しながら、地図を指さして覚えていました。しかし、

だんだんと、「この県は、どんな建物や食べ物が有名なんだろう？」

と、きょう味を持つようになりました。調べていくと、都道府県の場所を覚えるのが面白くなってきました。そして、滋賀県は何が有名なんだろうと気になって、家族にたずねてみました。

小さいときは、びわ湖へ泳ぎに行くと、「海は広いな。波がおもしろいな。」
とっていました。しかし、春休みに旅行に行った沖縄の海で泳いだとき、

「海水はすごくしょっぱいな。びわ湖とはぜんぜんちがうな。びわ湖は湖で海とはちがうんだな。」
と湖と海とのちがいを感しました。

滋賀県といえば、びわ湖と答える人が多い理由は、滋賀県の真ん中にあるからだと思います。ぼくは、夏休みに自主学習で、びわ湖についてインターネットを使って調べました。びわ湖の大きさや貯水量、びわ湖にある島など、特ちょうについて調べました。調べる前は、びわ湖の大きさは滋賀県全体の面積の二分の一くらいだと思っていました。しかし、本当は六分の一だと分かり、びっ

くりしました。

びわ湖には、沖島・竹生島・多景島の三つの島があります。沖島は、びわ湖最大の島で、約二百五十人が住んでいます。二時間ぐらい歩いたら一回りできる小さな島です。竹生島は無人島で神社があり、パワースポットになっています。多景島は、ぼくの住んでいる彦根市の無人島で、彦根市に島があるのを知って、びっくりしました。ぼくは、どの島にも行ったことがないので、一度三つの島へ行ってみたいと思いました。

五年生では、うみのこの船に乗ってびわ湖のことをもっと調べて勉強できるとお姉ちゃんに聞きました。びわ湖の大きさや深さ、島はどんな形をしているのかなどを、見て勉強するのがとても楽しみです。



【ひとこと】

びわ湖への思いを素直に書き表しています。会話文から書き出し思わず読んでみたくなる文章となっています。びわ湖のことを海と比較したり、インターネットで調べたりして明らかにしようと努めていますが、ふるさとへの思いは体験とともに深まりますよね。筆者の言うとおり5年生でのうみのこの乗船で、もっともっとびわ湖の素晴らしさに気づけるといいですね。

<入 選> 国宝彦根城の世界遺産登録を目指して

彦根市立城西小学校 5年 川上 心遙

私の住んでいる学区には彦根城があります。小学校の総合の学習で彦根城のフィールドワークを行い、滋賀県希少野生動植物調査監視指導員をされている方に彦根城の植物・動物について教わりました。この学習を通して私は彦根城の植物についてもっと知りたいと思い、「オオトックリイチゴ」について調べました。

オオトックリイチゴとはバラ科キイチゴ属の一種で、彦根城以外には知られていない彦根城に固有の植物です。6月上・中旬に開花し、紅紫色の5枚の小さな花弁をつけます。7月になると、淡紅色に熟した果実が実り、食べることも可能だと書いてありました。

次に、オオトックリイチゴの育て方を調べてみました。オオトックリイチゴは、ナワシロイチゴとトックリイチゴの自然交配だと考えられていて、1894年11月に牧野富太郎さんが発見したそうです。朝ドラの「らんまん」の主人公の植物学者である牧野富太郎さんが彦根城にも来ていたなんてびっくりしました。

最後に、オオトックリイチゴは彦根市指定天然記念物です。そんなオオトックリイチゴを守るための取り組みなどとして、彦根城内にて育成管理などの取り組みもされていることを知りました。

今、彦根城は世界遺産登録を目指しています。世界遺産に登録するためには、

- ①彦根城の世界的な価値があることを証明する。
- ②彦根城の価値を守るための仕組みを整える。
- ③地域の人々が彦根市を世界遺産にふさわしい町にしたいと思う。

の3つを満たす必要があるそうです。

その中で私にできることは、国宝彦根城が学

区内にあることを誇りに思い、もっと彦根を好きになっていくことだと感じました。

彦根城に来てくれた観光客に彦根がすてきな町だと思ってもらえるように、笑顔であいさつをするように心がけたり、ゴミが落ちていたら拾うようにしたいと思います。

少しずつの心がけでも、彦根市に住んでいるたくさんの人たちが世界遺産のある市にしたいと思い、少しずつの努力がいつか未来につながっていくことを考えて、私にでもできる簡単な取り組みから始めてみたいです。

そして、小学校でも彦根城の歴史について調べたり、世界遺産登録に向けてできることは何なのかを考える取り組みをしていきたいと思っています。



【ひとこと】

彦根城の世界遺産登録は、彦根市の悲願です。その彦根城でのフィールドワークで、筆者はオオトックリイチゴに興味を持ち、調べました。調べるうちに魅力を感じ、彦根城に対する思いを深めたようですね。彦根城を世界遺産にするためには、自分はどのように行動したらよいか、しっかりと見つめた作文となりました。

<入 選> 誇りの伝統行事、マーチングバンド

彦根市立城東小学校 6年 小鉢 麻琴

私の学校には素晴らしい伝統行事があります。私が誇りに思う伝統行事は、マーチングバンドです。マーチングバンドは、音楽と演技を組み合わせた活動で、みんなで一つの目標に向かって努力し、みんなで一丸となって音楽を演奏する素晴らしい行事です。そして、音楽を通して、仲間とのきずなを深めることができます。マーチングバンドは、運動会や夏祭り、城まつりなどのさまざまな行事やパレードで、演奏します。

毎年、私はパレードなどでひろうされている先ばいの姿を見て、すごく努力されてきたことが伝わってきました。ただ音楽を演奏するだけではなく、彦根市への思いや、一緒にがんばってきた仲間への思いを形にした姿を見せてもらえました。自信あふれるその姿は、地域の方々に感動をあたえ、地域の方々と一体となることに、私はふるさとへの誇りを感じました。

昨年十一月、いよいよ私達の代が引き継ぐことになりました。私は、いろいろな楽器がありますが、その中でも、ふくのが難しいけれど、とてもキレイな音色のトランペットを選びました。引き継ぎ式では、先ばいから「ぼくたちが大切に演奏してきたトランペットです。しっかり練習にはげんで大切にしてください。」と言われ、楽器を受けつぎました。初めて楽器を手にした時、今までの先ばいの思いがつかまっていて、すごく重く感じました。私は、「この思いをしっかりと背負って、大切にしよう。」と心から思いました。

そして、初めての音出しの日。音がでるかなと心配でした。「口をやわらかくしたら音が出やすいよ。」と言われ、ふいてみると、初めて自分が出した音が聞こえました。「トランペットってこんなにも美しい音がでるんだ。」と実感がわきました。今

でも、教えてもらったコツを意しきしています。

マーチングバンドを通して、ただ音楽をひけばいいのではない、ということ学びました。今まで何年も受け継いできた先ばいたちの思いを大事にして、練習にはげんでいこう、地域の方々に支えてくださった人からのエールや応援に、感謝する気持ちをもって演奏をひろうしよう、と思いました。今まで努力してきたことを、運動会やパレードなどで、すべて出しきる。そして、次の学年の人が今までのたくさんの先ばい方の思いを大切にしっかりと受け継いでくれる。それが私にとってのマーチングバンドです。

私はこれまで見てきた地域からのパワーやエールが自信になり、マーチングバンドへの誇りの気持ちが強くなりました。その気持ちを、これからはいよいよしっかり形にして、発音していきたいです。そして、マーチングバンドや仲間や地域の方々など、ふるさと彦根に、これからもしっかりと誇りをもっていきたいです。



【ひとこと】

学校の伝統行事であるマーチングバンドに、6年生として筆者は活動することになりました。今まで先輩の姿を見てその素晴らしさを感じてきましたが、自分が実際に参加することになり、先輩方や地域の方々の思いをより一層感じるようになりましたね。6年生になった筆者の成長が感じ取れます。これからも、胸を張って伝統行事を発展させてください。

中学生広場 「私の思い2023」 作文

<特選> 「立派な大人」へ

彦根市立西中学校 3年 前川 愛佳

「愛佳も、見ないうちにもう中学三年生か。大きくなったなあ。」

先日、久しぶりに会った親戚のおじさんに、ふとそう言われた。おじさんと最後に会ったのは、まだコロナウイルスが流行する前だったから、私が小学五年生のときだ。

「時が経つのは早いもんなあ。」
としみじみ言っているおじさんとお母さんたちが話しているのを見ながら、私は「確かにそうやなー。もう中三なんやもんなー。」と、ぼんやり考えていた。

私はこの四月で中学三年生になった。つまり、受験生だ。誕生日をおかえたら、十五歳になる。が、私自身にそのような自覚がまだあまりない。「勉強しなきゃ」と思うけれど、「まあ後でもいっか」と先延ばしにしてしまうのだ。これは私の悪い癖で、毎年、夏休み後半に必死に宿題をやらなければいけなくなる原因でもある。直そうとはしているのだが、「夏休みだし・・・」「部活頑張ったし・・・」と自分に言い訳をつくって、勉強や宿題という嫌なものから逃げてしまうのだ。

そんな私は、幼い頃から、嫌なものから逃げる度、親に叱られていた。宿題を日曜日の夜ごはんまでに終わらせていなかったとき。苦手な野菜を一口も食べずに残そうとしたとき。お手伝いを怠けたとき。そんなとき、両親はよくこんな言葉を言っていた。

「そんなんしてたら、立派な大人になれへんで!」

今の私はどうだろうか。幼い頃の思い出を振り返りながら、今の自分を見つめてみた。あの頃よりも体は成長したし、知識も増えた。けれど、「立派な大人に近づいたか?」と聞かれたら、答えに詰まってしまう。そもそも、立派な大人ってどんな人のことを指すのだろう?昔は何も気にならなかった言葉の意味が急に知りたくくなって、お母さん

に聞いてみた。するとお母さんは、

「別に『こんな人が立派!』って
いう定義はないけれども。」

と笑って、

「愛佳はどんな人のことやと思う?」

と聞いてきた。答えが知れると思っていた私は少しガッカリしたが、私にとっての「立派な大人像」を思い浮かべてみることにした。

まず思い浮かんだのが、「自分からあいさつができる人」だ。明るい笑顔であいさつしている人を見ると、こちらまで元気をもらえるし、前向きな気持ちになる。普段のちょっとしたことだけれど、しっかりできている人は素敵だなあと思う。また、あいさつ以外でも、時間をしっかり守るだとか、しめきりを守って出すといった、当たり前のことを当たり前前にできる人は、多くの人に信頼されて、好感をもたれるだろう。

そして、「周りを見て判断し、行動できる人」。今の私は、まだ自分のことだけで精一杯だが、いつか、周りの状況を見ながら臨機応変に動けるかっこいい人になりたいなと思っている。

「そんな、愛佳の理想の『立派な大人』になるために、あなたは今何をやるの?」

昨年から成年年齢が引き下げられたため、十八歳から大人の仲間入りだ。あと三年と少し。その中の、中学三年生という、将来に大きく影響する一年をどう過ごすのかは、私が決めるのだ。

他のだれでもない、自分自身のことだから。今できることから一つ一つ積み重ね、少しずつでも「立派な大人」に近づいていきたい。

次に親戚で集まったときには、

「見ないうちに立派になったなあ。」

と言われるかな、なんて考えている。



【ひとこと】

中学三年生になり、「立派な大人」について考えはじめた筆者。お母さんに聞いてみても答えは分かりません。結局は筆者自身が自分で見つけ出したのは、「あいさつができる人」、「周りを見て判断し、行動できる人」の二つでした。どちらもその理由からはさすがと思わされます。さらに、「立派な大人」になるために何をすべきか、しっかりと考えています。筆者の将来が楽しみです。



<特選> 戦跡訪問研修を通して学んだこと

彦根市立彦根中学校 3年 安田 絢音

私は春休みに次世代戦跡訪問研修に参加し、鹿児島で戦争について学びました。戦時中に使っていた地下壕や特攻隊員たちが実際に過ごしていた場所へ行くことで、戦争や特攻に関する知識だけでなく、当時の状況についての理解を深めることができました。

この研修で、深く心に残っているのが知覧特攻平和会館での学習です。知覧特攻平和会館には特攻隊員の遺影や遺品、遺書などがたくさん展示されていました。特に、自らの命をかけて戦った特攻隊員たちが遺した遺書からは、その決意と覚悟が伝わってきて、彼らが払った犠牲の大きさを改めて感じました。当時、特攻隊員は手紙を出すときに検閲があり、遺書にはほとんど本心を書くことができなかつたそうです。そのため、家族や友人への思いがこめられた遺書の中に「死にたくない」や「いやだ」などの言葉はありませんでした。特攻隊として出撃するということは、ほとんど死を意味しています。にもかかわらず、「笑って征きます」や「喜んで死んで行きます」と書かれた遺書もあり、「特攻隊として国のために死ぬことは立派で名誉なこと」という当時の考え方が伝わってきました。いくら国のため、大切な人たちのためとはいえども、自分の死に対する恐怖を少しも感じないなんて考えられません。中には、心から国のために特攻に行くことを望んでいた特攻隊員もいたのだと思うと、特攻は本当に許されないものだとし強く感じました。遺書は、自らの命を犠牲にして戦争に臨んだ特攻隊員たちが残すことのできた貴重なメッセージです。「死にたくない」と書くことさえ許されない中、彼らはどんな気持ちで手紙を書いていたのでしょうか。

そして、その手紙を読んだ家族や友人は何を思ったのかを想像すると、戦争や特攻の残



酷さを改めて実感しました。

戦争を過去のことや他人事と捉えてしまうと、その影響の大きさや



深刻さを忘れがちになると思います。戦争は私たちにとって遠い存在のように感じられますが、現代でも様々な国や地域で戦争が起こっていて、多くの人が被害を受けています。今も続いているウクライナとロシアの戦争は、現代において最も深刻な戦争のひとつであり、多くの犠牲者や避難民が生まれています。さらに、この戦争は単に国内だけの問題にとどまらず、国際社会に大きな影響を与えており、日本もウクライナに対して経済支援や医療支援などの形で支援を行っています。このように、私たちは過去の戦争だけでなく、現在の状況にも積極的に目を向けて、幅広い知識を身につける必要があると思いました。

戦争が終わってから長い年月が経った今、戦争を実際に経験した人は少なくなり、戦争に対する意識が薄まりつつあると感じます。戦争を体験したことのない私たちがその痛みや苦しみを完璧に理解することは難しいかもしれません。しかし、戦争の歴史を学び、教訓を引き継ぐことは私たちにもできると思います。戦争がもたらした悲劇を知り、平和を築くためにできることを考えることが大切だと思いました。

この研修を通して、戦争というものを現実的に考えることで、当時の人々の思いを知ることができるようになりました。戦争や特攻について学んだ私がすべきことは、戦争さえなければまだまだ生きられたはずの特攻隊員たちの思いや願いをしっかりと受け止めることだと思います。そして、私たちが当たり前だと思っている今の平和は、多くの犠牲のうで成り立っているということを忘れず、絶対に同じ過ちを繰り返さないようにする必要があります。と思いました。

【ひとこと】

春休みに体験した戦跡訪問は、筆者の心に大きく戦争と平和について考える機会となりました。平和会館に展示された遺書から、戦争や特攻の残酷さを改めて実感することができました。戦争というものを遠い存在のものとすることなく、真摯に考えようとする姿勢が随所に感じられました。今日地球上に起こっている事象にも目を背けることなく、同じ過ちを繰り返さないという強い思いを様々な機会を通じて発信してほしいものです。



<入選> 言葉

彦根市立東中学校 3年 池田 杜愛

皆さん、友達や家族などに何か伝えたいことがあるときのようにして伝えますか。言葉だったり、文字だったりで伝えますよね。しかし、SNSなどでコメントをすると人それぞれに違った考えがあるので、いろんな意味にとらえてしまう可能性があります。私たちはこれからどのように言葉と向きあっていくべきでしょうか。

私は、テレビで俳優や芸能人の方たちがなくなるというニュースをよく耳にします。私は、「なんで、自分から自分の人生をおわられたんだろう。」と疑問に思います。しかし、このようなことがおこってしまったのは、SNSでの悪口、動画サイトでの心ないコメント、誹謗中傷など相手の心を深く傷つけるものが原因です。もしも、自分が傷つけられる立場であったとしたら、自分も傷つく、嫌なはずなのになぜこんな相手が嫌がることをするのでしょうか。それは、自分のストレス発散のためだったり、もし自分が同じような立場だったら嫌だなと考えていないからだと思います。このように、SNSに何げなく書いたコメント、言葉が相手をどれほど苦しめるか知ったら怖いものです。一度、インターネット上、SNS上に書いたものは一生きえません。自分が何げなく発した言葉が相手の心を深く傷つけてしまうのです。

私には、好きなK-POPアイドルグループがいます。インターネット上でそのグループについてしらべていると、「〇〇ふとった」や「〇〇センター病」などとけんさくらんにでてきました。私は、おどろきのあまりこの記事の内容をみてしまいました。私はこの記事を見ていかりと同時に悲しみもありました。グループに対する偏見などの内容でした。偏見とかだったら軽い気持ちでのせたと思いますが、こんな軽い気持ちで書いた言葉でも多くの人を悲しませると思いました。軽い気持ちでもインターネット上にあげてしまった言葉はきえません。自分が書いた言葉に責任を持つべきだと思いました。

改めて、「言葉」にはいろんなとらえ方があると思いました。その「言葉」によって傷つく人がいるというのを常に考えるべきだと思います。自分の身の

回りでもこのようなことはあると思います。友達とラインをしているときに私はひっかかった言葉があります。週末に友達と遊ぶ約束をしているときに「何でくるの?」とおくられてきました。私は、この質問には二つのとらえ方があると思います。一つ目は、「なに」でくるの?というとらえ方です。このとらえ方だと、自転車だったり、車、歩きなどとこたえられる。二つ目は、「なんで」くるの?というとらえ方です。このとらえ方だと今までふつうに約束をしていたのに、なんでいきなり、「なんでくるの?」ときいてくるのか少し嫌な気持ちになります。「言葉」はとらえ方によっては人を傷つけます。また、誤解をまねくこともあります。

私は「言葉」は不思議だと思います。時には、誰かを傷つけたり、誰かをすくったりします。たとえば、「ありがとう」といわれたら苦しんでる人でもうれしくなると思います。私は、このような社会に生きていくために必要なことは、「選択」することです。言葉を選択することはとても重要だと思います。一度自分の中でこの言葉は、誰も傷つけないかと見直すことが大切だと思います。何げなく軽はずみな気持ちでSNS上にあげてしまうと一生消せません。そのことを頭のすみに常においておくことが大切だと思います。一人一人がこのことを大切にすればもっと良いものに世界がなると思います。一人一人が相手のことを考え、一人一人が誰かをたすけたいと思うことがこれからの社会で生きていくうえで大切だと思いました。



【ひとこと】

普段何気なく使っている言葉について、筆者は掘り下げて考えました。筆者が着目しているようにインターネットやSNSの発達によって、より言葉の役割は複雑化しています。だからこそ、言葉を「選択」することの重要性を筆者は訴えています。筆者の言うとおり相手のことを尊重する思いを常に持ち続ける社会でありたいものです。

<入 選> バングラデシュはなぜ親日国なのか

彦根市立東中学校 3年 ロイ 友貴

僕の父はバングラデシュ人です。だからたまにバングラデシュに行くことがあります。バングラデシュに行った時はみんなが歓迎してくれて、知らない人でもとても親切に接してくれます。なぜ、バングラデシュの人は日本人に対してこれほど親切なのか、いつも不思議に感じていました。だから、以前、そのことについてインターネットで調べてみたことがありました。また、直接父に尋ねてみたこともありました。

まず、父によるとバングラデシュでは教科書や授業で日本のことを教えているとのこと。原爆投下から復興した広島と長崎のことも教えていて、その四十年後には軍事ではなく、経済面において復活したことをとても評価していることが分かりました。

さらに、日本製のものが高品質で壊れにくく、信頼でき、自動車やバイク、家電製品などはとても人気なことが分かりました。

インターネットでも調べてみました。まず、日本は先進国の中で、いち早くバングラデシュ共和国を国家として認めたことは大きかったようです。建国の父と呼ばれるムジブル・ラーマン氏はすぐに日本を訪れ、当時の総理大臣田中角栄と会談しました。独立後から日本とバングラデシュは親密な関係であったことが分かりました。

次に、バングラデシュは「内戦と虐殺の中から生まれた国」で、経済的に苦しかったため、独立後、日本が援助を開始したことも挙げられます。日本が1971年を機に「援助される側」から「援助する側」へ変わったこと、日本が欧米諸国に比べて地理的に近く、得意とするインフラ整備の需要が大きいという理由もありました。現在もバングラデシュの国民が必要とする道路などのインフラ整備を行い、支援し続けています。

そして、二つの国の国旗。バングラデシュの国旗は日本の国旗と似ていて、緑と赤の二色で作られたシンプルな作りです。比べてみても色の違いと真ん中の赤い丸の位置が違うだけで、ほとんど同じです。1971年にムジブル・ラーマン氏が来日した時に「日本の魅力を感じ、日の丸のデザインを取り入れ

ることにした」とのエピソードがあります。また、2014年来日した首相のシェイク・ハシナ氏は講演で、「父は日本の日の丸を参考にして国旗を作った」と証言しています。

このように、日本がバングラデシュの独立をいち早く認め、最も援助を行っていること、バングラデシュと同じく戦争の悲惨さを体験し、復興を果たした日本を目標としていることが、バングラデシュが親日国である理由で、日本を一定以上に尊敬してくれ、日の丸を参考にして国旗をつくったり、学校で日本のことを教えたりしているため、僕たち日本人を身近に感じてくれているということが分かりました。おまけにバングラデシュの歴史も知ることができました。

2019年の年末から2020年の年明けにバングラデシュに行った後、新型コロナの影響で行くことができていません。先日、ハシナ首相が四年ぶりに来日したこともあり、最近家族でバングラデシュへ行きたいなどよく話題に上がります。

このように調べてみたのは少し前ですが、改めて思い出してみるとバングラデシュも日本もお互いに尊敬していてよかったです。

僕は今までバングラデシュのカレーが辛くて食べることができませんでした。でも今は食べられるようになりました。またバングラデシュでカレーを食べたいし、バングラデシュの人にも会いたいの、また近いうちにバングラデシュに行きたいです。



【ひとこと】

実際にバングラデシュで、人々が歓迎してくれたり、親切にしてくれたりしたことを疑問に感じ、日本との関係を解き明かしていきました。そして、バングラデシュも日本も互いに尊敬していることを知ることになります。その喜びは、筆者自身の自信にもつながっていくように感じました。尊敬しあうことの素晴らしさが伝わる作文となりました。

<入 選> 「挑戦する」ということ

彦根市立南中学校 3年 島村 日和

私はまだ将来の夢が決まっていない。十年後、二十年後、自分がどんなところでどんなことをしているのか想像もできない。でも、どんな人になりたいか、と聞かれたらすぐに答えられる。私はどんなことにも挑戦し続けられる人になりたい。

私は、普段からあまり挑戦ができない。学校の委員会決めでは、興味がある委員会に立候補したくても、「自分にできなかつたらどうしよう」「他の人が立候補しているし」と言い訳をしてしまっていて、一歩踏み出すことができない。そういう不安や恐怖があって、「今のままでいいか」と自分を守ってしまうのだ。でも、そうしているうちに、何にも挑戦しないままではいけない、挑戦できない自分を変えたい、という気持ちも自分の中で強くなっていった。

そんなことを思っていたときだった。いつものように下校していると、後ろの方で、「ガシャン!」という音がした。びっくりして振り返ると、私より下の学年らしき子が自転車と一緒に転んでしまっていた。自転車は田んぼに落ちてしまっていて、その子はひざを痛そうにしていた。助けに行こうかと思ったが、いつものように行動するのがこわくなって、体が動かないでいた。変わらないと。そう思っているだけでも行動できない自分に腹が立った。結局、その子は後から来た生徒に助けられ、無事に下校していった。そのとき私は、転んだ子をすぐに助けられて、あの子は行動力があってすごいな、私の方が早く転んだ子を見つけていたのになんで私は助けてあげられなかったんだろう、とモヤモヤした思いを抱えながら家に帰った。挑戦できるようになりたい気持ちは強くなる一方だった。

この出来事から一ヶ月ほど経った頃、私には好きなインフルエンサーができた。私はその人のことを知ったとき、すごいな、と尊敬した。その人は SNS の活動だけでなく、どんなことにも一生懸命に挑戦する人だった。その人がいつも新しく、いつも楽しそうでキラキラしているのは挑戦し続けているからなんだな、と感じた。私は、彼のような行動力あるすごい人になりたい、とその人にあこがれた。

私はそのときから、少しずつ挑戦するようになった。他の人からしたら、全然大したことではないけど、ずっと仲良くしたかった子に話しかけてみたり、やってみたかった英検を二度受けてみたりした。これらのことを試してみ、友達も一人増え、英検にも受かって良い経験を積むことができた。振りしぼった勇気を使って自分の世界を少しだけでも変えられて、本当にうれしかった。同時に、今までよく分からなかった「挑戦」というものが、身をもって分かった気がして、生活が楽しくなった。

私は、少し挑戦してみて、やりたいことができた。それは、外国に留学していろんな友達をつくることと、世界中の国々を旅して国外のことを知ることだ。今中学三年生の私には少し難しいところもあるかもしれない。でも、身の回りのささいなところから変えていって、挑戦をあきらめなかつたら、それはいつか絶対できるはずだ、と最近少し分かるようになった。これからは私は、物怖じせず行動して、どんなことにも挑戦し続ける人になれるようにがんばっていかうと思う。



【ひとこと】

思っているよりも行動できない自分には誰ももどかしさを覚えません。筆者も、挑戦してみたいことを持ちながら自分を変えられずにいたのですが、あるとき、挑戦し続けている人物を見つけます。感化され、自分自身も少しずつ挑戦の幅を広げていくと、周りは魅力的なものへと変わっていきました。筆者の決意のとおり、これからも挑戦し続ける気持ちを忘れずに行動してください。

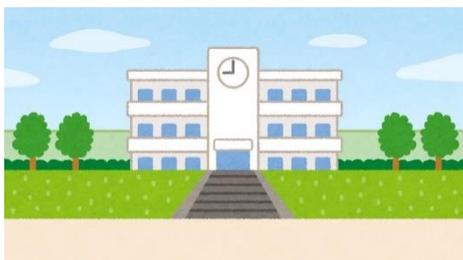
<入 選> 三百六十度

彦根市立鳥居本中学校 3年 後藤 咲良

何気ない日常の尊さを私たちは誰よりも知っている。何の前触れもなく、突然始まった制限の多すぎる生活。コロナウイルスは私たちから当たり前にあった「日常」を奪い、ものすごい勢いでこの世界を、私たちの生活を、百八十度かえてしまった。

しかし、そんな非日常的だと思っていた生活は、三年の月日が流れるうちにいつの間にか「日常」へと化してしまっていた。感染症を恐れ、家にいることが多くなった人もたくさんいるだろう。消毒液は、今や見かけない日はないほど、あらゆる場所に潜んでいる。そんな数々の変化の中でも、マスクを着用しての生活に違和感を覚えなくなったことは一番大きな変化だと思う。ふと小学校の卒業アルバムを開くと、そこには別世界のような光景が広がっていた。誰もが顔を隠さずに過ごす教室。たくさんの歓声が飛び交う運動会。いつでも、もっているものを全て出そうと前のめりになっていたことが蘇ってきた。制限が多くある今の生活は、以前の生活からは考えることのできない姿なのだろう。

一方で私たちはこの三年間、コロナウイルスについて少しずつ理解を深めた。そして、とうとう未知のウイルスと闘うのではなく、共存していくという選択をした。「五類引き下げ」というニュース。これは、コロナウイルスが季節性インフルエンザと同じ扱いになるということを意味している。決してウイルスがなくなったわけでも、よく効く薬が開発されたわけでもない。警戒はまだ必要だ。だが、感染対策は個人の判断に委ねられるようになり、私たちは数々の制限からようやく解放される。待ち望んでいた日常がようやく静かにかえてくるのだ。今度は少しずつ百八十度もとに戻る。心が軽くなったような気がした。



私たちがこの三年間、失ったものはあまりに多い。命を奪われた人は六百九十万人。後遺症に苦しみ、これまで通りの生活が送れなくなった人、仕事



が思うようにいかなかった人は今もたくさんいる。信じがたいことかもしれないが、それは決して他人事ではなかった。おびえる時間もないままにコロナウイルスは私たちの学校生活に大きな影響をもたらしたのだ。突然はじまった一斉休校。あの日から私たちの学校生活は変わってしまった。学校に行きたくても行けない日々、楽しみにしていた様々な学校行事は中止を余儀なくされた。私たちは、学ぶ機会と成長するチャンスをコロナウイルスによって奪われてしまったのだ。それぞれが、やりきれない思いを抱え、我慢を強いられた三年間だったと思う。

私の所属する吹奏楽部では例年、五月の初めに市内の中学三年生が集まって演奏会を開いている。毎日一生懸命に練習に励んでおられる先輩の姿はとても眩しく、当時中学二年生だった私はその姿に強く憧れを抱いていた。そして、先輩の奏でられる音楽を聴くことを心待ちにしていた。しかし、演奏会が目前となったある日、再び感染拡大が広がったことを理由に、その舞台は急遽中止となった。どうすることもできない現実に、きっと先輩方はもどかしさを感じていたことだと思う。

あれから一年の月日を経た私たちは三年生となり、先日その舞台を終えた。先輩方が練習されてきた曲と同じ曲を今年、ようやく披露することができたのだ。観客席には先輩の姿。私はたくさんの想いが込みあげてきた。この舞台に立てたことは運が良かった、それだけのこと。私たちは、先輩方の見るのできなかった景色を自分自身の目で見る事ができた。

私はこの三年間で、生活が百八十度が二回、つまり三百六十度変わった。三年前に戻ったようにも思えるが、たくさんの事を学んだ私は心の面で少し

は成長できたと思う。

先が見えなかったこの三年間は、私に何よりも大切なものを教えてくれた。学ぶ機会や成長できるチャンスというのは当たり前を用意されているものではない。社会が明るい証拠でもある。失うことで得た何気ない日常への感謝の気持ち。当たり前だと錯覚できるくらいの平穏な生活に戻ることを私たちは望んでいる。だが、どんなに「当たり前」となっても、この三年間で痛感した何気ない日常への感謝を私は、忘れない。

【ひとこと】

中学校での三年の年月は、何にも代えがたい貴重な時間と考えているからこそ、コロナ禍では様々な思いが巡ったようですね。私たちの生活も百八十度変わり、やりきれない思いを持って過ごした日々でした。しかしながら、ようやく新たな日常が実感できる日々がやってきて、喜びもひとしおだったようです。どんな出来事もマイナス面ばかりを捉えるのではなく、自分自身の成長の糧ととらえる筆者の生き方が素敵です。



「豊かな心をはぐくむ家庭づくり」
(家族ふれあいサンデー推進運動) 絵画・ポスター

特選

かぞくみんなてプラレール



彦根市立城西小学校 1年 菊本 遥日

楽しかった夏休み



彦根市立旭森小学校 6年 石原 結月

家族仲良し



滋賀県立河瀬中学校 2年 富川 希

入選

にこにこ家族



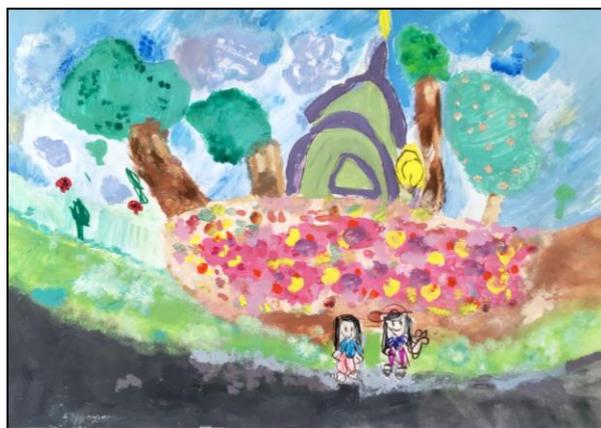
彦根市立旭森小学校 2年 辺志切 奏

家族でプールをして楽しかったよ



彦根市立城北小学校 3年 内堀 桜輔

ひかりちゃんとニコニコ



彦根市立城東小学校 4年 寺村 実結



だれのが一番ながいかな



彦根市立金城小学校 5年 杉田 あかり



家族で温まろう



彦根市立西中学校 2年 牧野 圭佑

家族は笑顔の源



彦根市立西中学校 3年 榎本 結香

「わたしのふるさと」 絵画

特選

たかみやのはなび



彦根市立城西小学校 1年 北村 碧葉

びわ湖岸でサイクリング



彦根市立城西小学校 4年 毛利 優太

宝の矢倉川



彦根市立鳥居本小学校 5年 小堀 珀斗

摺針峠から



彦根市立鳥居本中学校 1年 小嶋 歌歩

入選

ひこねじょう



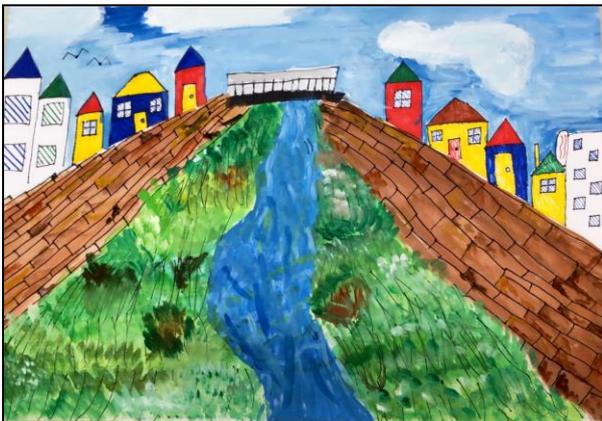
彦根市立旭森小学校 1年 長谷川 ひな

おばあちゃんのはたけ



彦根市立鳥居本小学校 2年 飯田 絢心

私の町の小さな川



彦根市立城東小学校 3年 國枝 奈乃葉

ふるさとの夜



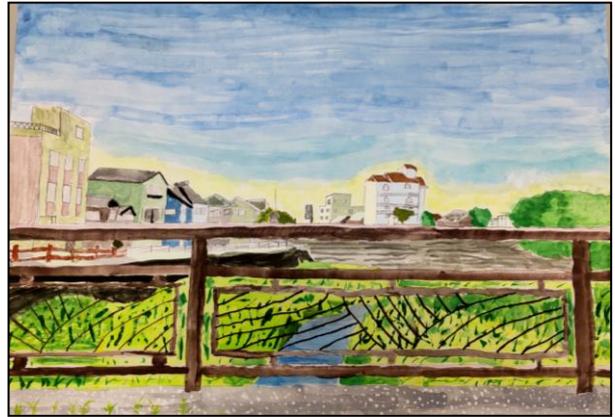
彦根市立城北小学校 4年 井尻 宗寿

立夏の頃



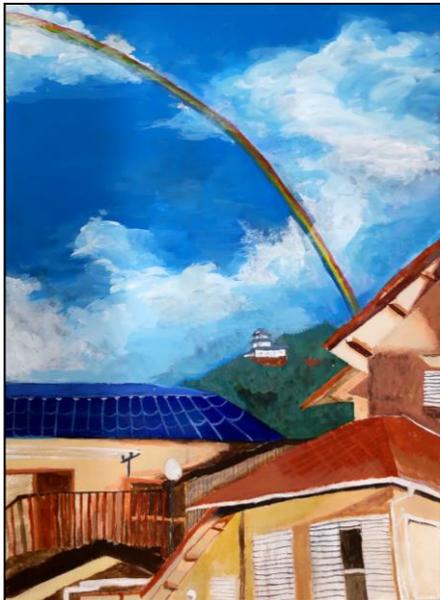
彦根市立佐和山小学校 6年 川幡 莉良

芹川



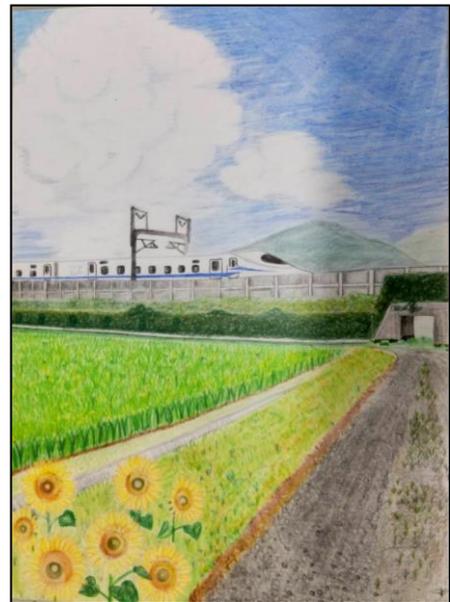
彦根市立佐和山小学校 6年 西山 瑛翔

虹



彦根市立西中学校 2年 辻 佳奈恵

緑の夏



彦根市立鳥居本中学校 3年 後藤 咲良

佳作入賞者一覧

「わたしのふるさと」作文

わたしのふるさと	旭森小学校	4年	中嶋 快一
わたしのふるさと 犬の散歩とあいさつと	若葉小学校	5年	大菅 麻央
わたしのふるさと	城西小学校	6年	林 知広
彦根のいいところ、どんなところ?	城南小学校	6年	浅尾 友翔
魅力あふれる彦根	城北小学校	6年	榎本 圭佑
やさしい町 ひこね	河瀬小学校	6年	平松 昊輝

中学生広場「私の思い 2023」作文

世界を変える第一歩目に	西中学校	1年	大谷 名月
選挙権を持たない私たちの意見の伝え方	西中学校	2年	黒枝 紗矢子
心をこめて「いただきます」	西中学校	2年	前川 将輝
偏見のない世の中へ	稲枝中学校	2年	山田 沙季
私達はAIとどう関わっていくべきか	南中学校	3年	石村 太一
文字の責任をもつこと	稲枝中学校	3年	和田 佳菜未

「豊かな心をはぐくむ家庭づくり」(家族ふれあいサンデー推進運動) 絵画・ポスター

みんなでたのしく さっかーあそび	河瀬小学校	1年	成宮 怜皇
かぞくみんなでおせわをしているよ	旭森小学校	2年	本田 莉乃
4年ぶりの花火大会	金城小学校	3年	川瀬 莉心
家族で川遊びキャンプ	旭森小学校	4年	成田 琴葉
家族でキャンプ	平田小学校	6年	平石 優樹
大切にしよう 家族との時間	彦根中学校	1年	若林 涼介
家族の絆	西中学校	2年	小栗 日向花
お母さんのお弁当	彦根中学校	3年	山口 佑海

「わたしのふるさと」絵画

じっとみつめるらんかんさま	佐和山小学校	1年	寺村 拓海
むちんばしからみた 高宮花火大会	高宮小学校	2年	中野 統
ひこねじょう	若葉小学校	3年	荒尾 侑愛
生きものいっぱいひこね	旭森小学校	3年	中野 勇士
橋からみた高宮のはなび	城南小学校	4年	岩噌 悠良
懐しや、男鬼町	鳥居本小学校	5年	飯田 大和
思い出の花	高宮小学校	6年	西澤 叶
きれいにかざられた地蔵	河瀬小学校	6年	野村 倭永
ふるさとの散歩道	河瀬中学校	2年	川崎 稜太

審査員紹介

審査は次の方々をお願いしました。(敬称略)

「わたしのふるさと」作文

元中学校長	白石 晴夫	彦根市青少年育成市民会議会長	吉田 徳一郎
元小学校長	藤井 純子	彦根市少年センター所長	森 貞以子

中学生広場「私の思い 2023」作文

元中学校長	白石 晴夫	彦根市青少年育成市民会議会長	吉田 徳一郎
元小学校長	藤井 純子	彦根市少年センター所長	森 貞以子

「豊かな心をはぐくむ家庭づくり」(家族ふれあいサンデー推進運動) 絵画・ポスター

元小学校長	小野 淳	彦根市青少年育成市民会議会長	吉田 徳一郎
元小学校長	加藤 洋一	彦根市少年センター所長	森 貞以子

「わたしのふるさと」絵画

元小学校長	小野 淳	彦根市青少年育成市民会議会長	吉田 徳一郎
元小学校長	加藤 洋一	彦根市少年センター所長	森 貞以子

★★ あとがき ★★

今年度の入賞作品集を刊行するはこびとなりました。

彦根市内の小学生・中学生の皆さんより作文、絵画、ポスターに多数の応募をしていただき、感謝申し上げます。

紙面の都合で、特選・入選作品のみの収録となりましたが、今年度も審査員の藤井先生にお願いして、作文に短評を添えていただきました。

多くの方々にご覧いただけるようお願いしております。

